

県福祉作文コンクール表彰式開催!

応募総数は一万九百七十一篇

県社会福祉協議会・県共同募金会主催、神奈川県・市・市区町村教育委員会、NHK横浜放送局、神奈川県新聞社、テレビ神奈川、市町村ともしび運動推進組織の後援で実施しました「第二十六回神奈川県福祉作文コンクール」の入選作品が決定し、去る一月二十五日に県社会福祉会館で表彰式がおこなわれました。

対象は、県内の小・中学生で、ことしの応募総数は一万九百七十一篇。各地域ごとの地区審査会を経て、県審査員会による最終審査で、優秀賞八篇、準優秀賞、佳作十篇ずつの合計五十六作品が選ばれました。

今回は、福祉の体験活動や学習をテーマにした作品が多く見られましたが、どの作品も子どもならではの視点や素直な思い、やさしい心がありました。

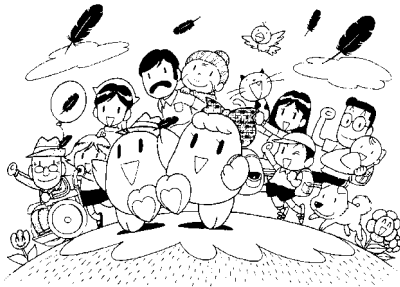
全応募作品を代表して、優秀賞の中から、小学校二年生の作文を紹介します。

(県共同募金会)

◆県共同募金会 ☎045-312-6339



神奈川県知事賞受賞のようす



優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

ぴーちゃんと6-1病とう

藤沢市立善行小学校

二年 戸賀瀬 蒼

ぼくには、ぴーちゃんという2才の妹がいます。ぴーちゃんは、きよ年の7月に1才になってすぐに白血病になりました。そして横浜市大の6-1小児病とうに入院しました。ぼくは、パパとママと相だんして学校からかえったら、るす番のれんしゅうをしました。さい初はさみしかったけど、「ぴーちゃんは病院のサークルベットで、ひとりでねてるんだ。」と思ってがんばりました。そして、るす番も大じょうぶになりました。土日は病院に行きました。6-1の入口や、となりのデイルームには、きょうだいが入院していて、お母さんをまつている子たちがあるので、すぐ友だちになつてあそびました。

4月に、ぼくは2年生になりました。「こんどの夏休みにぴーちゃんがかえってくるんだ。よーしぴーをきたえてやろう。」と思いました。ぼくは、ぴーちゃんが時どき外はくでおうちにかえつてくると、とてもかわいくてぴーちゃんがいるだけで、しあわせなきもちになりました。それでママに「この広い宇ちゅうの中で、ぼくとぴーちゃんをこのうちに生んでくれてありがとう。」と言いました。

ある日ママが「6-1には名古屋とか青森とか遠くから、病気をなおしにきている子たちがいるんだよ。みんな、かぞくとはなれてお母さんと二人でがんばってるんだよ。市大のちかくに、とまれるおうちがあれば、とっても楽になるんだって。」と言って、ずっとかんがえていました。ぼくは、ぼくのうちから市大までは、1じかんくらいで行けるから、ぴーちゃんにも会えるし、まい日パパとママと一しょにいられるんだと思いました。

ママは6-1の3人のお母さんたちと、おうちを作るかどうをはじめました。小児科の横田きょうじゅが応えんしてくれました。

夏休みになって、ぴーちゃんのたい院がきまりました。でも前の日に「もうまくはくり」でだめになってしまいました。みんなショックでした。でもぼくは「ぴーはさい強だから必ずよくなる。」と思いました。ママは、おうちを作るのをがんばると言いました。ぼくはママが行く所について行き、はじめて新ぶん記者や市会ぎいんの人に会いました。えらいのにやさしい人がいてよかったと思います。ぼくは、ぴーちゃんも6-1の病気の子も、かぞくもみんなたすかるといいと思います。